

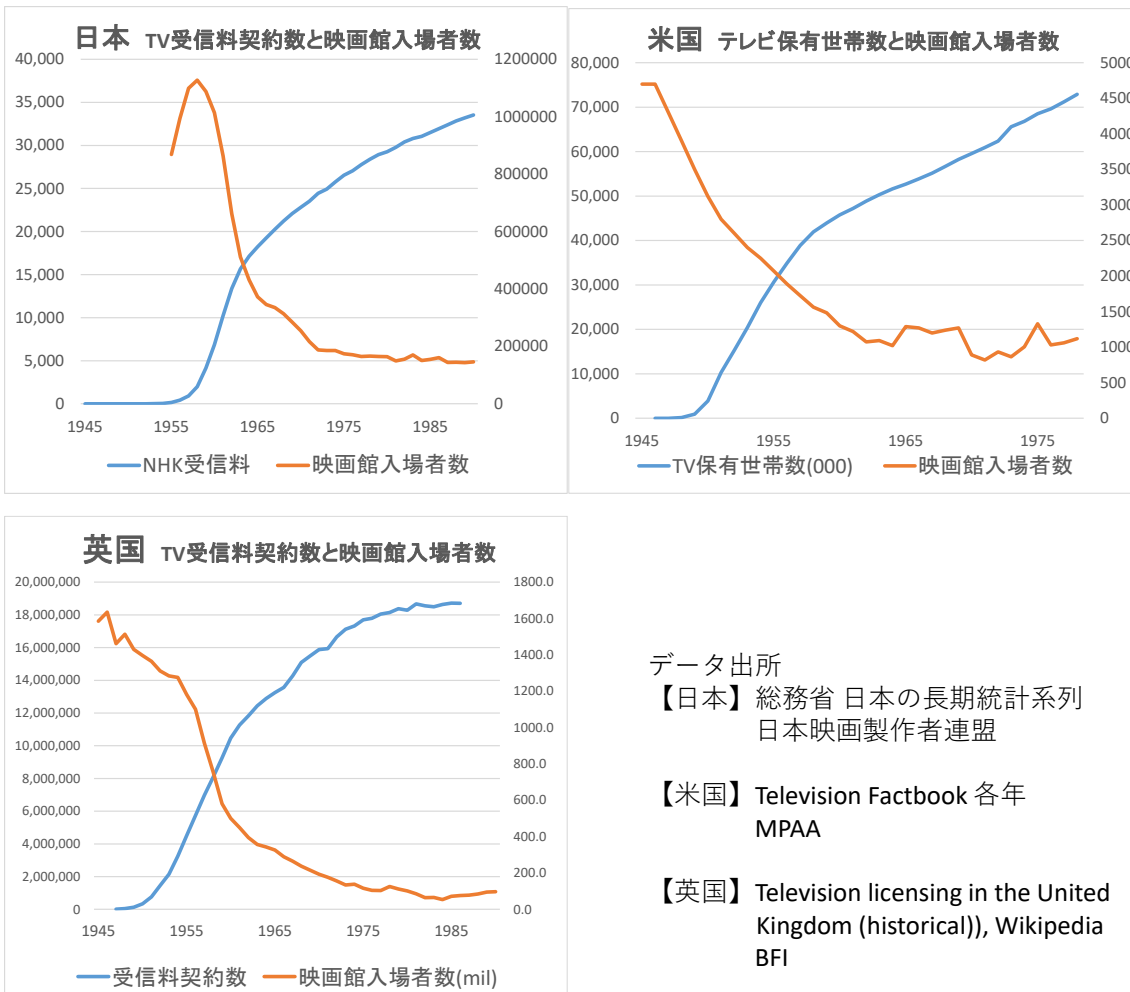
映画がプレミアムな映像であり続けるために

24年9月9日

青山学院大学 内山隆

約 130 年の映画・映像の歴史は、大きく、①映画しかなかった黎明期、②テレビが台頭した時代 (1950s～)、③第3の映像メディア、ネット配信の台頭期 (2010s～)、に分けられます。

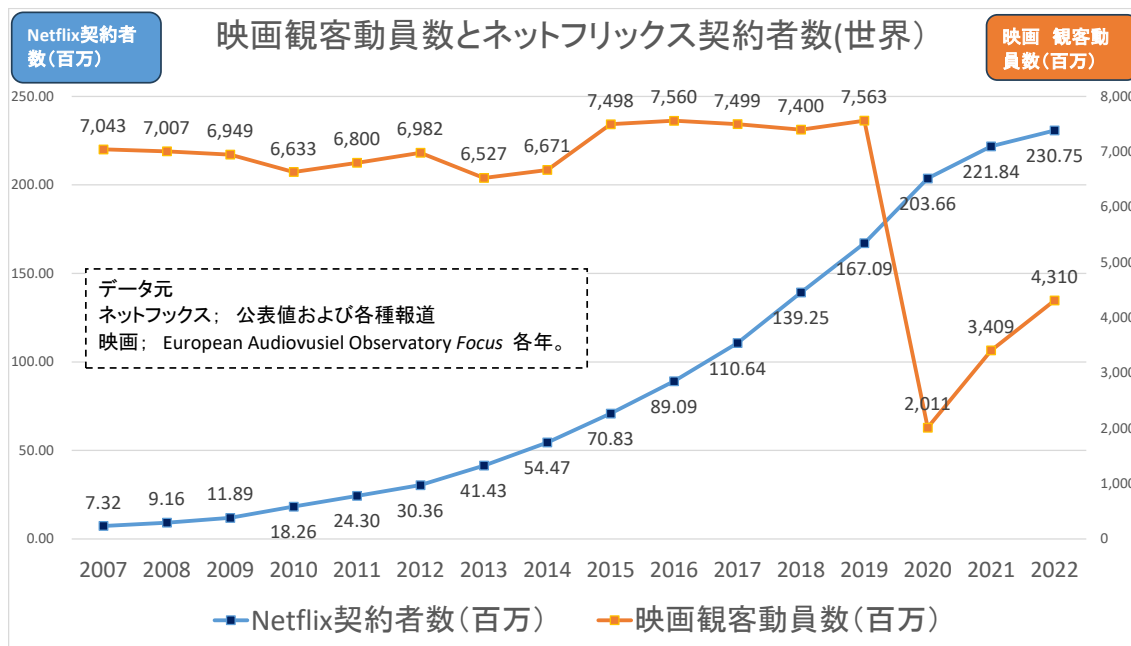
図表 1950 年代～、テレビの登場と、映画観客動員数の圧迫 (日・米・英)



このうち 1950 年代からのテレビの時代、結果として、世界ではいかに放送産業との連携を取ったかが、安定財源という観点で、強い映画産業であるための鍵でした。その際、国家の制度設計は、(形はいろいろあったにせよ)かなり大きな意味を持っていました。一方、その当時も「いつかは映画化」のような、創り手にとっての映画の特別感は生きていました。

2010年代からのネット配信の時代、コロナ禍以前までは映画はさほどの影響を受けていないようにもみえます。映画の特別感は、少なくとも2010年代は維持されていたようです。ただ20年代に入ると、コロナ禍もあり、またフランスにおいては、制度が逆作用し、例えば、ディズニーは映画館よりも、配信ディズニー・プラスに配給優先させる事例など、少し状況が変わりつつあります。

図表 映画観客動員数とネット配信の進展



世界との比較では、わが国の映画産業の特徴は、文化庁・芸文振による支援があるものの、極端に補助金や税制優遇に依存しない、民間自走の構図があります。その裏で“無理”が生じていることもあるやもしれず、昨年の日本映画制作適正化機構(映適)の活動開始は、その是正の一旦とも受け取れます。隘路を縫うように、非常に微妙なバランスのなかで生まれた映適を、ちやぶ台返りするような議論ではなく、持続可能なものにしていく議論にすべきと考えます。

またある程度、前衛性の強い芸術作品に対しての補助制度には、映画を特別なものとし続ける意味において、一定の合理性が考えられます。例えば、欧州のような高い補助金支援が望ましいかは、広く国民の理解の上で行わないと、せっかく生まれたこの場を無為にしてしまう危険がありますし、公平な助成制度の構築は、この際、再検討すべきかと思います。また「映画の芸術性に対する国民の理解」推進という点も、一段高める必要があろうかと思います。民間の自立性と公的助成の拡充は、ジレンマでもあります。

図表 (欧州映画) Breakdown of cumulative financing volume by source (2021)

Rank	Financing source	Amount in MEUR	% share
1	Direct public funding	343.3	26%
2	Production incentives	275.4	21%
3	Producer investments (excl. broadcasters)	242.9	18%
4	Broadcaster investments	222.5	17%
5	Pre-sales (excl. broadcasters)	177.5	13%
6	Private equity cash investments	22.0	2%
7	Debt financing	19.0	1%
8	In-kind investments	3.6	0%
9	Other financing sources	22.6	2%
Total sample		1,328.8	100%

【出所】EAB(2024), "Fiction film financing in Europe: A sample analysis of films released in 2021," European Audiovisual Observatory, p40, 30 April 2024, <https://rm.coe.int/fiction-film-financing-in-europe-2023-edition-m-kanzler/1680af8262>

日本の映画産業は世界のなかで、決して小さなものではありませんが、さらなる大きな発展を遂げようとするれば、いろいろな“あたりまえ”を見直すことが求められるかもしれません。

図表 映画興行収入 世界上位10か国

Top 10 markets worldwide by gross box office | 2018-2022 ^e

In USD billion. Converted at average annual exchange rates. Ranked by 2022 values.

Sources: OBS, MPA, Omdia, Gower Street Analytics, National data sources

Rank	Market	2018	2019	2020	2021	2022	Year-over-year change 2022/2021	Comparison 2022/avg 2017-2019
1	US & Canada	11.88	11.38	2.22	4.54	7.53	65.7%	65.7%
2	China	9.24	9.30	2.96	7.33	4.47	-39.0%	50.1%
3	Japan	2.02	2.40	1.34	1.48	1.63	10.6%	75.9%
4	India ⁽¹⁾	1.51	1.60	0.27	0.50	1.35	170.6%	88.5%
5	France	1.58	1.62	0.49	0.80	1.15	44.9%	72.6%
6	United Kingdom	1.71	1.60	0.39	0.75	1.12	50.0%	67.6%
7	South Korea	1.65	1.64	0.43	0.51	0.90	76.0%	55.7%
8	Germany	1.06	1.15	0.36	0.44	0.76	72.3%	67.1%
9	Australia	0.93	0.85	0.28	0.45	0.70	54.6%	78.0%
10	Mexico	0.85	0.97	0.15	0.36	0.57	58.7%	64.2%
World total		41.8	42.39	11.8	21.3	25.9	21.8%	62.1%
Growth rate - World		2.2%	1.4%	-72.2%	80.6%	21.8%	21.8%	62.1%
Growth rate - Top 10		5.8%	0.3%	-72.6%	92.8%	17.7%	17.7%	63.4%
Growth rate - Top 10 without China		3.7%	0.1%	-74.4%	65.5%	60.0%	60.0%	68.6%

(1) Restated series.

【出所】EAB(2023), *Focus 2023*, p11, European Audiovisual Observatory, 01/06/2023.

今後も映画が、観客にとっても創り手にとっても、商業的にも芸術的にも、特別なものであり続けるために、この会議体はあると考えております。